



当院手術室看護師の教育・育成に関する意識調査と今後の課題

赤尾 美弥子, 西田 聖治, 溝口 寿代

済生会滋賀県病院 看護部

要旨

近年、手術の高度化に伴い、手術室看護師には高い専門性と実践力が求められている。当院ではかつて「3回ルール」に基づき、新人が短期間で自立を迫られる教育体制を敷いていたが、精神的・身体的負担が大きく、不要な失敗を経験させていた可能性があった。現在は業務時間内での学習を原則とし、回数制限を設けない新教育体制へ移行している。本研究では、スタッフ33名を対象に教育・育成に対する意識調査を行い、現行体制の評価と今後の課題を検討した。結果、旧体制は「成長促進」との肯定的評価がある一方で「負担が大きい」との回答が多く、新体制は「安心して学べる」との回答が過半数を占めた。教育チームへの期待は中立的な回答が目立ち、活動の可視化が課題と考えられた。今後は、教育スキル研修や思考発話を取り入れた指導法などを教育チームが中心となって推進し学びと働き方の両立を支え、新人が安心して自律的に成長できる環境を整える必要がある。

I. はじめに

近年、複雑化する手術への対応や、手術適応患者のハイリスク化などにより、より高い専門性と実践能力が手術室看護師には求められる。当院ではかつて「3回ルール」と呼ばれる旧教育体制(表1)が存在し、新人は3回の器械出し経験で自立を目指すことが求められていた。この体制下においては、勤務時間内での学習機会が十分に確保されておらず、勤務時間外における指導や自宅での予習・復習が暗黙の前提として期待されていた。その結果、学習負担が新人個人に委ねられる側面が強く、精神的・身体的負担の増大につながる可能性があった。現在は業務時間内での学習を原則とし、回数制限を設けない新教育体制に移行しており、さらに2024年度には人材育成と現場教育の問題に対応するため教育チームを発足した。

今回、旧教育体制と新教育体制に対する評価を

比較し、教育チームに対する期待感も含めて現状の課題を明らかにし、今後の教育体制について検討することを目的として本研究を行った。

II. 対象と方法

1. 対象

令和6年7月現在、手術室に勤務している看護師33名(係長、非常勤含む)。

2. 方法

教育体制に関する無記名アンケートを実施した。設問は「旧教育体制・新教育体制の評価」「時間外指導や予習・復習に関する考え方」「教育チームへの期待」など計13項目と自由記載を含んだ(表2)。集計は、回答者を経験年数別に10年目以下(1群:若手)と11年目以上(2群:ベテラン)に分け、回答傾向を比較した。

表1 新旧教育体制について

旧教育体制	新教育体制
<p>・業務時間内は教務を優先し、勉強会や予習・復習は業務時間外に行うルール。</p> <p>・「3回ルール」を基本とし、フォローは3回まで、それ以降は技術習得レベルに関わらず、独り立ちとみなされる。</p> <p>メリット>・短期間での自立を求められるため、成長が早い。</p> <p>・必要に駆られて、自主的に学習する姿勢が定着。</p> <p>デメリット>・指導が感覚的で、フォロー者によって内容・質に差がある。</p> <p>・情報共有が乏しく、教育が属人的になりやすい。</p> <p>・業務時間外学習の負担が大きく、プレッシャーが強い。</p>	<p>・業務に必要な勉強会や予習・復習は業務時間内に行い、そのための残業はできる限りしないルール。</p> <p>・新人の成長状況に合わせてフォローし、回数縛りはない。</p> <p>新人が自信を持って業務できるようになるまでフォローする。</p> <p>メリット>・経験チェックリストにより、指導内容や成長が可視化・共有化されたことで、進捗を客観的に把握できる。</p> <p>・業務時間外学習の負担が少なく、プライベートが充実。</p> <p>デメリット>・フォロー期間が長期化しやすく、自立が遅れる傾向。</p> <p>・手厚い支援があるため、受け身の学習姿勢になりやすい。</p>

表2 アンケートの質問内容

旧教育体制について	新教育体制について
<p>①業務時間外に指導・研修・予習・復習を行うことで、指導者も新人も身体的・精神的に負担の軽減になっている。</p> <p>②旧教育体制（3回ルール）で指導を行ったことがある（新人は指導を受けたことがある）。</p> <p>③器械出し看護師担当時に、指導者は3回ルールで十分に指導が行えている（新人は受けられている）。</p> <p>④外回り看護師担当時に、指導者は3回ルールで十分に指導が行えている（新人は受けられている）。</p> <p>⑤自宅学習に多くの時間（週15時間以上）を使っている（使っていた）。</p> <p>⑥手術室に勤務していて（配属されて）どのように学習すればいいのか迷うことがある（あった）。</p>	<p>⑦業務時間内に指導・研修・予習・復習を行うことで、指導者も新人も身体的・精神的に負担の軽減になっている。</p> <p>⑧器械出し看護師担当時に、指導者は十分に指導が行えている（新人は受けられている）。</p> <p>⑨外回り看護師担当時に、指導者は十分に指導が行えている（新人は受けられている）。</p> <p>⑩部署内での主任以上の勉強会に対して、今後の教育に期待できる。</p> <p>⑪手術室教育チームの発足に対して、今後の教育に期待できる。</p> <p>⑫現在の新人教育体制は旧教育体制より、教育として妥当である。</p> <p>⑬新教育体制で高い専門性と実践能力の高い看護師の育成が期待できる。</p>

3. 倫理的配慮

匿名性を保持、研究目的以外には用いない事を説明し、自由意志で回答を得た。

Ⅲ. 結果

- ・アンケートの回収率は100%、回答者の経験年数内訳は図1に示した。
- ・アンケートの集計結果は図2に示した。
- ・質問①⑦旧新体制の時間外指導、予習復習について、旧体制では両群とも否定的回答の割合が

高かった。新体制では若手で肯定的回答の割合が高かった。ベテランでも肯定～中立回答ともに多く、否定的ではなかった。若手の自由記載欄に「時間外での指導や復習時間が欲しい」との意見があり、残業を望まない一方で、必要に応じて学習時間を確保したいという意向が示された。

- ・指導の評価、質問③④では両群とも否定的回答の割合が高く、特に外回りで顕著となった。質問⑧⑨現在の指導の評価では、若手は肯定的回答が多かったが、ベテランは中立～否定的回答

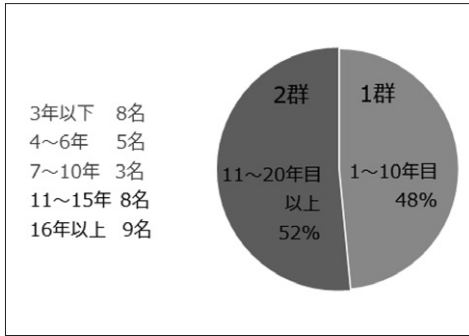


図1 アンケート回答者の経験年数内訳

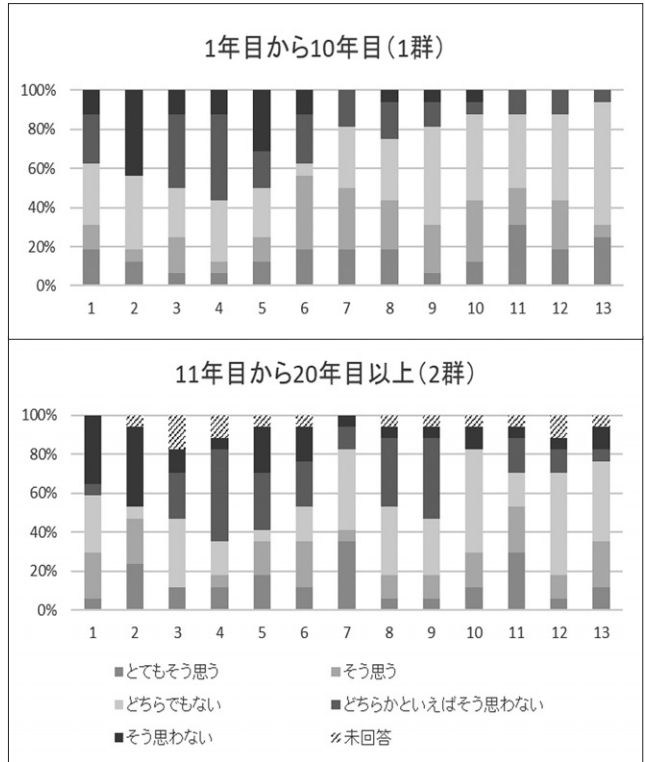


図2 アンケートの結果

が多い結果となった。ベテランの自由記載欄に「10年前の方が成長が早かったと思う」との意見があり、厳しさ不足を指摘する世代間認識の差がみられた。

- 質問⑩⑪⑫⑬教育チームに対する期待感が高くなく、中立的回答が目立った。

IV. 考 察

旧体制下で「3回ルール」により育った看護師の多くは、4回目からは独り立ちというプレッシャーの中で指導を受け、実践を通じて成長していったと推察される。この「自立せざるを得ない状況」が、より集中して取り組む姿勢につながり、成長を早めていた可能性はある。一方で、失敗を多く経験させる面もあった。成人学習の特徴として「失敗から学ぶ」利点はあるが、不要な失敗を経験させていた可能性もある。しかし、ベテラン

は短期間でのスキル習得という利点を評価しており、早期戦力化を目指した指導方法であったと推察する。

新体制ではフォローの回数制限がなく、余裕を持って取り組める環境が整う一方で、新人看護師が主体的に取り組む意識が希薄になっているように感じる場面がある。また、ベテランは否定的、若手は肯定的という評価に差があり、指導者側と指導を受ける側で認識の違いが見られた。さらに、Z世代の特徴として「保守的で安定志向」「挑戦より失敗回避」「アドリブが苦手」といった傾向があること、教育内容や技術習得スピードの基準が世代間で異なる事も考慮する必要がある。これらを指導者側が理解し、適切な指導を実践することが必要であると考え。加えて、新人看護師を取り巻く学習環境や主体性に課題がないとは言えない。「予習・復習はできる限り時間内に行う」という方針がある一方で、若手からは時間外での

指導や復習時間を求める声もあり、方針と意識の間にズレがみられた。新人のニーズを的確に汲み取り、適切な指導とともにフォロー体制を整えることが求められる。世代間での認識の違いを踏まえた教育対応が、教育の質を担保するために不可欠であると考ええる。

今後は、教育スキル研修や思考発話を取り入れた指導法などを教育チームが中心となって推進することで、学びと働き方の両立を支え新人が安心して自律的に成長できる環境を整える必要がある。

V. まとめ

新教育体制では負担軽減が進んだが、新人が不安を感じなくなるほどの学習環境の提供ができておらず、指導の質や成長支援に課題があることがわかった。今後は、教育チームを中心に、指導者への教育スキル研修や思考発話を取り入れた指導法の活用など、課題解決に向けた取り組みを進めることで、自律的に成長できる手術室看護師の育成を目指していきたい。

参考文献

- 1) 中井俊樹. 第2版 看護現場で使える教育学の理論と技法－個別指導や参加型研修に役立つ120のキーワード. 東京:MCメディカ出版; 2023. p.15, 22, 35.
- 2) 厚生労働省. 新人看護職員ガイドライン【改訂版】. 東京:厚生労働省; 2014.

論文受付: 2025年9月16日 論文受理: 2025年11月10日